

るもの

遠藤周作

新潮社版

はは
母なるもの

定価 500円



印刷 昭和46年 5 月15日

発行 昭和46年 5 月20日

著者 遠藤周作(えんどうしゅうさく)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替東京808 電話(03)260-1111

印刷所 大日本印刷株式会社 製本所 大進堂製本

© 1971, Shūsaku Endō, Printed in Japan

乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

《目次》

母なるもの 5

小さな町にて 47

学生 85

ガリレヤの春 123

巡礼 145

知事へ群像の一人◇ 171

蓬売りの男へ群像の一人◇

カバ
ー
写
真

並
河
萬
里

遠藤周作創作集・母なるもの

母
な
る
も
の

夕暮、港についた。

フェリー・ボートはまだ到着していない。小さな岸壁にたつと、藁屑や野菜の葉っぱの浮いた灰色の小波が、仔犬が水を飲むような小さな音をたてて棧橋にぶつかっていた。トラックの一台駐車した空地の向うに二軒の倉庫があり、その倉庫の前で男が燃やしている焚火の色が赤黒く動いている。

待合室には長靴をはいた土地の男たちが五、六人ベンチに腰かけて切符売場があくのを辛抱よく待っている。足もとには魚を一杯つめこんだ箱や古トランクがおいてあったが、その中に、鶏を無理矢理に押しこんだ籠が転がっていた。籠の隙間から、鶏は首を長くだして苦しそうにもがいている。ベンチの人たちは私に時々、探るような視線をむけながら、だまって坐っている。こんな光景をいつか、西洋の画集で見たような気がする。しかし誰の作品か、何時見たのかも思いだせぬ。

海の向う、厩舎に長くひろがった対岸の島の燈がかすかに光っている。どこかで犬が鳴いてい

るがそれが島から聞えるのかこちら側なのかわからない。

燈の一部だと思っていたものが、少しずつ動いている。それでやっと、こちらに来るフェリー・ボートだと区別がついた。ようやく明いた切符売場の前に、さっきベンチに腰かけていた長靴の男たちが列をつくり、そのうしろに並ぶと魚の匂いが鼻についた。あの島では、たいいていの住人は半農半漁だと聞いている。

どの顔も似ている。頬骨がとび出ているせいか、眼がくぼんで、無表情で、そのため何かに怯えているようにみえるのだ。つまり狡さと臆病さとが一緒になってこの土地の人のこの怯えた顔を作りだしているのだ。そう思うのは、私が今から行く島について持っている先入観のせいなのかも知れぬ。なにしろ江戸時代、あの島の住人は、貧しさと重労働とそれから宗門迫害とで苦しんできたからだ。

やっと、フェリー・ボートに乗り、港を離れることができた。一日に三回しか、九州本土と、この島との間には交通の便がない。二年前までは、このボートも朝晩おのおの一度しか往復していなかったそうである。

ボートと言っても伝馬船のようなもので椅子もない。自転車や魚の箱や古トランクの間で乗客は窓から吹きこむ冷たい海風にさらされたまま立っている。東京ならば愚痴や文句を言う人も出ようが、誰もだまっている。聞えるのは船のエンジンの音だけで、足もとに転がった籠のなかで鶏までウンともスンとも言わない。靴先で少しつくと、鶏は怯えた表情をした。それがさっきの人たちの表情に似ていておかしかった。

風が更に強くなり、海も黒く、波も黒く、私は幾度か煙草に火をつけようとしたが、いくらやっても、風のためマッチの軸が無駄になるだけで唾にぬれた煙草は船の外に放り棄てた。もつとも風のため船のどこかへ、転がったかもしれないね。今日半日、バスにゆられて長崎からここまで来た疲労で背中から肩がすっかり凝り、眼をつぶってエンジンの音をきいていた。

エンジンの響きが幾度か真黒な海のなかで急に力なくなる。すぐまた急に勢いよく音をあげ、しばらくして、また、ゆるむ。そういう繰り返しを幾回も聞いたあと、眼をあけると、もう島の燈がすぐ眼の前にあつた。

「おーい」

呼ぶ声をする。

「渡辺さんはおらんかのオ。綱を投げてくれまっせ」

それから綱を棧橋に投げる重い鈍い音がひびいた。

土地の人たちのあとから船をおりた。つめたい夜の空気のなかには海と魚との匂いがまじっている。改札口を出ると、五、六軒の店が、干物や土産物を売っている。このあたりでは飛魚を干したアゴという干物が名物だそうである。長靴をはいた、ジャンパー姿の男がその店の前で、改札口を出てくる我々をじっと見つめていたが、私の方に近よってきて、

「御苦労さまでござります。先生さまを教会からお迎えにあげました」

こちらが恐縮するほど、頭を幾度もさげ、それから、私の小さな靴を無理矢理にひったくろうとした。いくら断わつても、靴をつかんだまま離さない。私の手にぶつかった彼の掌は、木の根

のように大きく、固かった。それは私の知っている東京の信者たちの湿ったやわらかな手とちがっていた。

いくら肩を並べて歩こうとしても、彼は頑かたくなに一步の距離を保って、うしろから、ついてきた。先生さまと言われたさっきの言葉を思いだして私は当惑していた。こう言う呼び方をされると土地の人は警戒心を持つようになるかもしれない。

港から匂っていた魚の臭いは、どこまでも残っていた。その臭いは、両側の屋根のひくい家にも、狭い道にも長い長い間、しみついていているように思えた。さっきとは全く反対に、今度は左手の海のむこうに、九州の燈がかすかにみえる。私は、

「お元気ですか、神父さんは。手紙をもらったので、すぐ飛んで来たんだが……」

うしろからは何の返事もきこえない。なにか気を悪くさせたのかと、気をつかったが、そうではないらしく、遠慮をして無駄口をたたかぬようにしているのかもしれない。あるいは長い昔からの習性で、ここの土地の者たちはむやみにしゃべらぬのが、一番、自分の身を守る方策と考えているのかもしれない。

あの神父には、東京であつた。私は当時、切支丹を背景にした小説を書いていたので、ある集まりで九州の島から出てきた彼に自分から進んで話しかけた。その人もまた眼がくぼみ、頬骨のとび出たこのあたりの漁師特有の顔をしていた。東京のえらい司教や修道女たちの間にまじってすっかり怯えたせいかな、話しかけても、ただ強張った表情をして、言葉少なく返事する点が、今、私の鞆をもっている男とそっくりだった。

「深堀神父を知っておられますか」

その前年、私は長崎からバスで一時間ほど行った漁村で、村の司祭をやっている深堀神父に随分、世話になった。浦上町出身のこの人は海で私に魚つりを教えてくれた。まだ頑として再改宗しない、かくれの家にもつれていつてくれた。言うまでもなくかくれ切支丹たちの信じている宗教は、長い鎖国の間に、本当の基督教から隔たって、神道や仏教や土俗的な迷信まで混じはじめている。だから長崎から五島、生月に散在している彼等を再改宗させることは、明治に渡日したプチジャン神父以来、あの地方の教会の仕事である。

「教会に泊めてもらいましたね」

話の糸口を引きだしても、向うは、ジュースのコップを固く握りしめたまま、はい、はいとしか返事をしない。

「おたくの管区にも、かくれ切支丹はいるのですか」

「はう」

「この頃は、連中、テレビなどで、写されて収入になるもんだから、次第に悦びだしましたね。深堀神父の紹介した爺さんなどは、まるで、ショウの説明役みたいでしたが。そちらの、かくれ切支丹はすぐ会ってくれますか」

「いや、むつかしか、とです」

それで話は切れて私は彼から離れて、もっと話しやすい連中のところに行った。

だが、思いがけなくこの朴訥な田舎司祭から一カ月前、手紙がきた。カトリック信者が必ず使

う「主の平安」という書きだしから始まるその手紙には、自分の管区内に住んでいるかくれたちを説得した結果、その納戸神やおらしよ（祈り）の写しを見せるそうだというのが手紙の内容だった。字は意外と達筆だった。

「この町にもかくれは住んですか」

うしろをふりむいて、そうたずねると、男は首をふって、

「おりません。山の部落に住んどります」

半時間後ついた教会では、入口の前に、黒いスータンを着た男が手をうしろに組んで、自転車をもった青年と一緒に立っていた。

一度だけが前にも角、会ったので、こちらが気やすく挨拶すると、向うは少し当惑したような表情で、青年と迎えに来てくれた男を見た。それは私が迂闊だったのである。東京や大阪とちがって、この地方では、神父さまはいわばその村では村長と同じように、時にはそれ以上に敬われている殿さまのような存在だということを忘れていたわけだ。

「次郎。中村さんに、先生が来たと」と司祭は青年に命令した。「言うてこいや」青年は恭しく頭をさげて自転車にまたがると、闇のなかにすぐ消えていった。

「かくれがいる部落はどちらですか」

私の質問に、神父は、今来た道とは反対の方向を指さした。山にさえぎられているのか燈もみえない。かくれ切支丹たちは、迫害時代、役人の眼をのがれるために、できるだけ探しにくい山間や海岸に住んだのだが、ここも同じなのにちがいない。明日はかなり、歩くなと、私はあまり

強くない自分の体のことを考えた。七年前に私は胸部の手術を受けて直ったものの、まだ体力には自信がないのである。

母の夢をみた。夢のなかの私は胸の手術を受けて病室に連れてきたばかりらしく、死体のようにベッドの上に放りだされていた。鼻孔には酸素ボンベにつながれたゴム管が入れられて、右手にも足にも針が突っこまれていたが、それはベッドにくくりつけた輸血瓶から血を送るためだった。

私は意識を半ば失っている筈なのに、自分の手を握っている灰色の翳が、けだるい麻酔の感覚のなかでどうやら誰かかはわかっていった。それは母だった。病室にはふしぎに医師も妻もいなかった。

そういう夢を、今日まで幾度か見た。眼が醒めたあと、その夢と現実とがまだ区別できず、しばらく寢床の上でぼんやりしているのも、それから、やっとここが三年間も入院した病院のなかではなく自分の家であることに気づいて、思わず溜息をつくのも何時ものことだった。

夢のことは、妻には黙っていた。実際には三回にわたるその手術の夜、一睡もしないで看病してくれたのは、妻だったのに、その妻が夢のなかには存在していないのが申し訳ない気がしたためだが、それよりもその奥に自分も気づいていないような、私と母との固い結びつきが、彼女の死後二十年もたった今でも、あるのが夢にまで出て厭だったからである。

精神分析学など詳しくはない私にはこうした夢が一体、なにを意味するのか、わからない。夢

のなかで母の顔が実際にみえるわけではない。その動きも明確ではない。あとから考えれば、それは母らしくもあるが、母と断言できもしない。ただそれは、妻でもなく、附添婦でも看護婦でもなく、もちろん医師でもなかった。

記憶にある限り、病氣の時、母から手を握られて眠ったという経験は子供時代にもない。平生、すぐに思いだす母のイメージは、烈しく生きる女の姿である。

五歳の頃、私たちは父の仕事の関係で満洲の大連に住んでいた。はつきりと險に浮ぶのは、小さな家の窓からさがっている魚の歯のような氷柱である。空は鉛色で今にも雪がふりそうなのに雪は降ってはいない。六畳ほどの部屋のなかで母はヴァイオリンの練習をやっている。もう何時間も、ただ一つの旋律を繰り返しかえし繰り返しかえし弾いている。ヴァイオリンを腰にはさんだ顔は固く、石のようで、眼だけが虚空の一点に注がれ、その虚空の一点のなかに自分の探しもとめる、たった一つの音を掴みだそうとするようだった。そのたった一つの音が掴めぬまま彼女は吐息をつき、いらだち、弓を持った手を絃の上に動かしつづけている。私はその腰に、褐色の胼胝^{たが}がまるで汚点のようにできているのを知っていた。それは、音楽学校の学生の頃から、たえず、ヴァイオリンを腰の下にはさんだためだったし、五本の指先も、ふれると石のように固くなっていた。それはもう幾千回と、一つの音をみつけるために、絃を強く抑えるためだった。

小学生時代の母のイメージ。それは私の心には夫から棄てられた女としての母である。大連の薄暗い夕暮の部屋で彼女はソファに腰をおろしたまま石像のように動かない。そうやって懸命に苦しみに耐えているのが子供の私にはたまらなかった。横で宿題をやるふりをしながら、私は体